

第2章

定時制課程に所属する高校教員の勤務実態

1. 労働時間量

第1章の全日制教員の分析に引き続き、本章では定時制に所属する教員（以下、定時制教員）における勤務の実態を、「時間量」という側面からみてみよう。

「調査概要」第8節第5項にもあるように、定時制教員については、正規の勤務時間のパターンが、各学校、各教員、また、勤務する日によっても異なることがわかっている。勤務日の残業時間が全日制教員と同じ方法で算出できないため、本調査では、勤務日の労働時間（持帰りを含まない）量および持帰り時間量、休日の残業時間量、持帰り時間量のみを算出を行っている。

はじめに、各期の勤務日・1日あたりの勤務実態について概観してみよう（表2-1-1）。勤務日の出勤時刻から退勤時刻までの間に業務を行った時間量である平均労働時間（持帰りを含まない）量を見ると、第1期8時間52分、第2期8時間59分、第3期8時間46分と、第2期の労働時間（持帰りを含まない）量がほかの調査時期に比べて長い。第1期から第3期全体を通してみると、8時間53分であり、この時期、定時制教員は9時間弱学校で業務を行っていることがわかる。第1章でみた通り、この時期の全日制教員は10時間00分学校で業務を行っており、定時制教員のほうが全日制教員よりもおよそ1時間短いことがわかる。

主に自宅で学校に関する業務を行った時間量である持帰り時間量をみると、勤務日は第1期28分、第2期16分、第3期33分と、第2期の平均持帰り時間量がほかの調査時期に比べて短く、第3期は若干長めだ。第1期から第3期全体を通してみると25分であり、この時期、定時制教員は平均およそ30分弱、自宅で学校に關係する業務を行っていることがわかる。

表2-1-1 勤務日・1日あたりの平均労働時間(持帰りを含まない)・残業時間・持帰り時間量

	労働時間(持帰りを含まない)量	残業時間量	持帰り時間量
第1期 (10/16~10/29)	8時間52分 〔8時間40分〕(1.345)	—	28分 〔3分〕(0.948)
第2期 (11/6~11/19)	8時間59分 〔8時間57分〕(1.142)	—	16分 〔0分〕(0.590)
第3期 (11/27~12/10)	8時間46分 〔8時間41分〕(1.316)	—	33分 〔6分〕(1.090)
全体	8時間53分 〔8時間47分〕(1.258)	—	25分 〔3分〕(0.868)

〔 〕内は中央値、()内は標準偏差を示す。

休日・1日あたりの平均残業時間量をみると(表2-1-2)、第1期20分、第2期15分、第3期13分と、どの期をみても、休日に学校へ行って業務を行うことは比較的少ないようだ。第1期から第3期全体を通してみても16分であり、全日制教員の休日残業時間量が1時間15分であったことを考えると、1時間短いことがわかる。さらに、中央値をみると第1期、第2期、第3期ともに0分であり、休日に学校へ行って業務を行うことは、あまり一般的ではないようだ。

また、休日・1日あたりの平均持帰り時間量をみると、第1期55分、第2期38分、第3期50分と第2期の持帰り時間量がほかの期に比べて短い。第1期から第3期全体を通してみても46分であり、勤務日の持帰り時間量に比べると20分程長い。全日制教員の休日持帰り時間量(1時間26分)と比べると40分短い。ただし、中央値をみてみると第1期、第2期、第3期ともに0分であり、休日に家で業務を行うことは、あまり一般的ではないようだ。

2. 残業時間および持帰り時間の業務内容

定時制教員は、出勤してから退勤するまでの時間にどのような業務を行っているのだろうか。勤務日における労働時間(持帰りを含まない)の内訳についてみてみよう(表2-2-1)。

本調査は、教員の行う業務を「朝の業務」「授業」「授業準備」「学習指導」「成績処理」「生徒指導(集団)」「生徒指導(個別)」「部活動」「生徒会指導」「学校行事」「学年・学級経営」「学校経営」「会議・打合せ」「事務・報告書作成」「校内研修」「保護者・PTA対応」「地域対応」「行政・関係団体対応」「校務としての研修」「(校外の)会議」「その他の校務」に分類し、それぞれの業務に費やした時間量を算出することができる設計になっている(業務の分類の詳細は、「調査の概要」第9節を参照のこと)。

表2-2-1は、調査時期ごとに勤務日における労働時間(持帰りを含まない)の内訳を、業務内容別に調べ、上位5項目を並べた結果である。第1期では、労働時間(持帰りを含まない)量のうち最も多くの時間が費やされているのは、授業準備(101分)である。次いで、授業(85分)、学校行事(50分)とつづく。ほかの期では上位5つの業務項目に入らない「学校行事」が入っているのは、10月というこの期の時期的特徴と考えられる。

第2期についても、第1期同様、最も長いのは、授業準備(110分)であり、つづいて授業(106分)、事務・報告書作成(41分)となっている。

第3期は、ほかの調査時期よりも授業準備(81分)にかける時間が短く、授業(96分)と順位が入れ替わっている。そのかわりに時間量が長くなったのは、成績処理(80分)であり、順位も3位にあがっている。これは、主に12月という調査時期を考えると、学期末の定期考査などの準備や採点、評価などがあるのだろう。

表2-1-2 休日・1日あたりの平均残業時間・持帰り時間量

	残業時間量	持帰り時間量
第1期 (10/16~10/29)	20分 〔0分〕(1.270)	55分 〔0分〕(1.786)
第2期 (11/6~11/19)	15分 〔0分〕(0.897)	38分 〔0分〕(1.335)
第3期 (11/27~12/10)	13分 〔0分〕(0.705)	50分 〔0分〕(1.623)
全体	16分 〔0分〕(0.994)	46分 〔0分〕(1.569)

〔 〕内は中央値、()内は標準偏差を示す。

表2-2-1 勤務日の労働時間(持帰りを含まない)内訳

	第1期 (10/16~10/29)	第2期 (11/6~11/19)	第3期 (11/27~12/10)
全体	8時間52分	8時間59分	8時間46分
1	授業準備 101分	授業準備 110分	授業 96分
2	授業 85分	授業 106分	授業準備 81分
3	学校行事 50分	事務・報告書作成 41分	成績処理 80分
4	成績処理 42分	学校経営 41分	事務・報告書作成 40分
5	事務・報告書作成 41分	その他の校務 36分	学校経営 37分

では、勤務日における持帰り時間の内訳はどうだろうか。表2-2-2が、調査時期ごとの結果である。

第1期から第3期とも、持帰り業務として主に時間が費やされているのは、授業準備（第1期9分、第2期5分、第3期7分）である。これまでにみた通り、高校教員は全日制も定時制も持帰り時間量自体が少ない。そのため上位5つをみても、それぞれにかかる時間量は短い。授業準備につづいて長いのは、校務としての研修やその他の校務である。

さらに、休日の残業時間の内訳をみてみよう。表2-2-3は、調査時期ごとに休日の残業時間の内訳を、業務内容別に調べた結果である。第1期では、休日残業時間のうち最も多くの時間が費やされているのは、部活動（9分）である。次いで、その他の校務（2分）、事務・報告書作成（2分）とつづく。第2期も、部活動（7分）が最も長く、事務・報告書作成（2分）、その他の校務（1分）となっている。第3期は、部活動（4分）がやはり長いですが、その他の調査時期に比して、時間が短くなっている。つづいて、その他の校務（2分）、成績処理（2分）となっている。

休日に学校に出てまで行う業務は、やはり部活動などの、自宅では行いにくい業務が多いようだ。

さらに、休日の持帰り時間の内訳を表2-2-4からみてみよう。第1期、第2期ともに、持帰り業務として主に時間が費やされているのは、授業準備、部活動である。第3期は、成績処理（17分）が最も長く、つづいて授業準備、部活動となっている。

このようにしてみると、学期末の成績処理業務は主に勤務日の学校にいる間に行われてはいるものの、そこで行いきれなかったものに関しては休日に持帰り業務として処理されていることがわかる。

表2-2-2 勤務日の持帰り時間内訳

	第1期 (10/16~10/29)		第2期 (11/6~11/19)		第3期 (11/27~12/10)	
全体	28分		16分		33分	
1	授業準備	9分	授業準備	5分	授業準備	7分
2	校務としての研修	6分	その他の校務	2分	その他の校務	6分
3	その他の校務	3分	校務としての研修	2分	校務としての研修	4分
4	成績処理	1分	会議	1分	成績処理	4分
5	事務・報告書作成	1分	事務・報告書作成	1分	会議	1分

表2-2-3 休日の残業時間内訳

	第1期 (10/16~10/29)		第2期 (11/6~11/19)		第3期 (11/27~12/10)	
全体	20分		15分		13分	
1	部活動	9分	部活動	7分	部活動	4分
2	その他の校務	2分	事務・報告書作成	2分	その他の校務	2分
3	事務・報告書作成	2分	その他の校務	1分	成績処理	2分
4	学校行事	1分	学校経営	0分	学校行事	0分
5	授業準備	1分	成績処理	0分	授業準備	0分

表2-2-4 休日の持帰り時間内訳

	第1期 (10/16~10/29)		第2期 (11/6~11/19)		第3期 (11/27~12/10)	
全体	55分		38分		50分	
1	授業準備	16分	授業準備	13分	成績処理	17分
2	部活動	8分	部活動	6分	授業準備	13分
3	その他の校務	6分	その他の校務	4分	部活動	4分
4	成績処理	4分	事務・報告書作成	4分	事務・報告書作成	4分
5	校務としての研修	3分	成績処理	2分	その他の校務	2分

3. 残業時間量および持帰り時間量の分布

全日制教員については、勤務日・1日あたりの平均残業時間量の分布を確認したが、定時制教員については、今回勤務日・1日あたりの平均残業時間量を算出していない。そのため、ここでは勤務日・1日あたりの平均持帰り時間量の分布からみてみよう(図2-3-1)。

まず、調査時期全体の平均をみてみよう。持帰り時間量として分布が集中しているのは、0分である。半数近くの定時制教員が勤務日に持帰りをしない。一方、一定程度自宅に持帰って学校に関する業務を行う教員も約5割存在する。また約3割が30分以下(0分を除く)であるが、あとの約2割はそれ以上の時間を持帰り業務に費やしている。それぞれの時間量の分布を細かくみると、0分が46.6%、1時間以下(0分を除く)の教員は40.9%、1時間01分~2時間以下の教員は6.8%、2時間01分~3時間以下の教員は3.6%、3時間01分~4時間以下の教員は1.1%となっている。

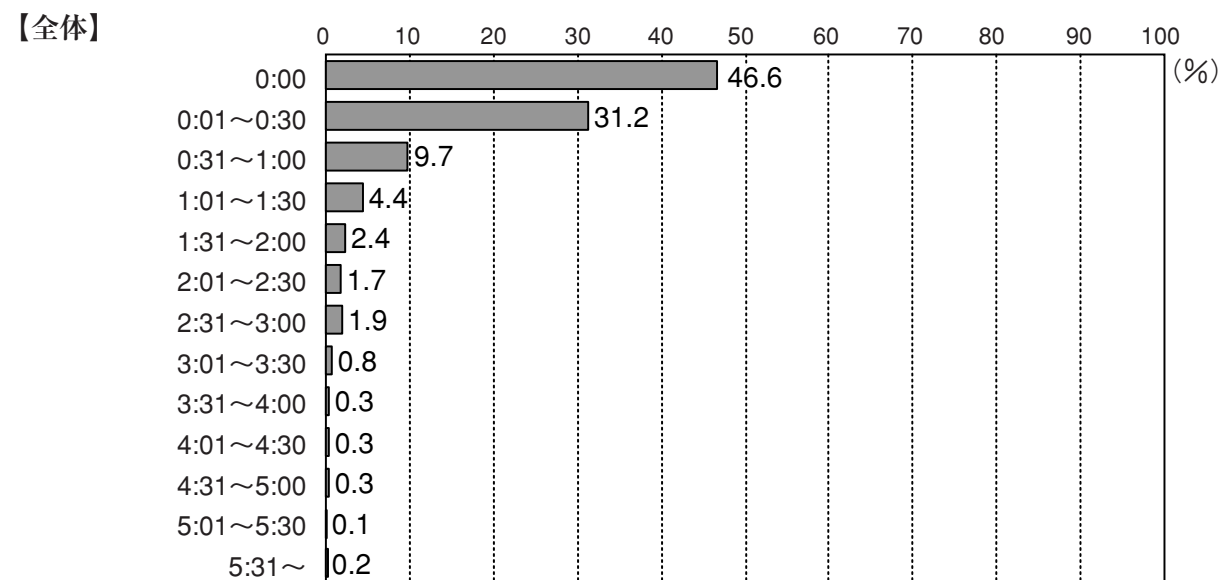
つづいて、各調査時期を詳しくみていこう。第1期は、持帰り時間0分が46.7%、1時間以下(0分を除く)の教員は38.1%、1時間01分~2時間以下の教員は7.6%、2時間01分~3時間以下の教員は4.1%、3時間01分~4時間以下の教員は2.1%、4時間を超える教員は1.2%である。

また、第2期の分布では、持帰り時間0分が54.4%、1時間以下(0分を除く)の教員は37.8%、1時間01分~2時間以下の教員は4.6%、2時間01分~3時間以下の教員は2.4%、3時間01分~4時間以下の教員は0.8%、4時間を超える教員は0.0%である。

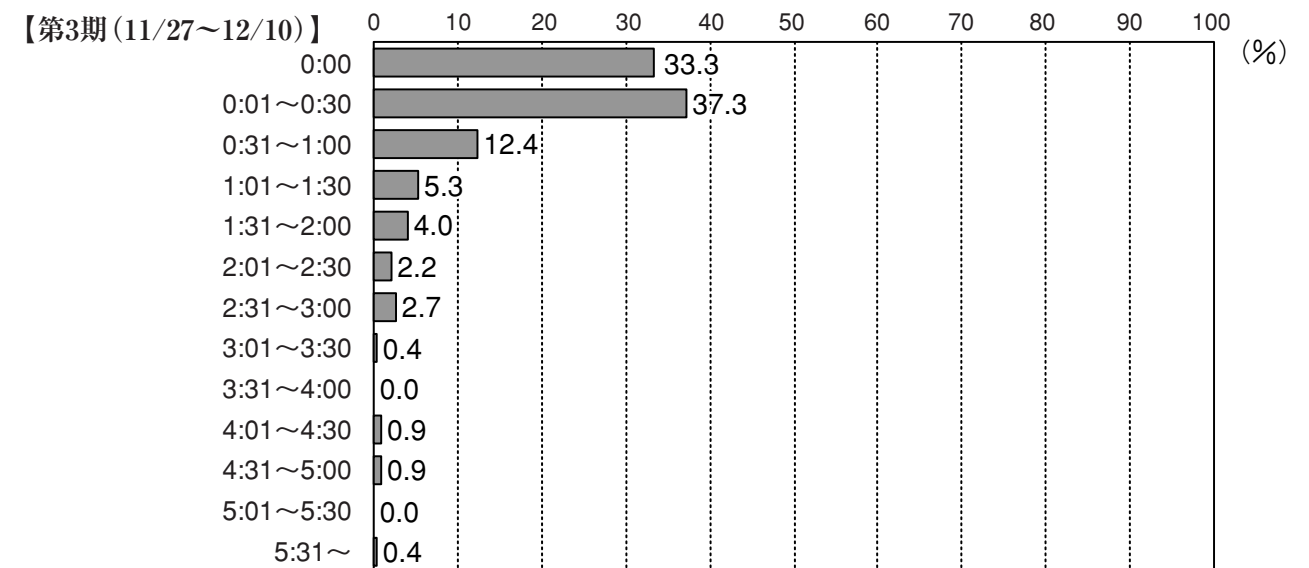
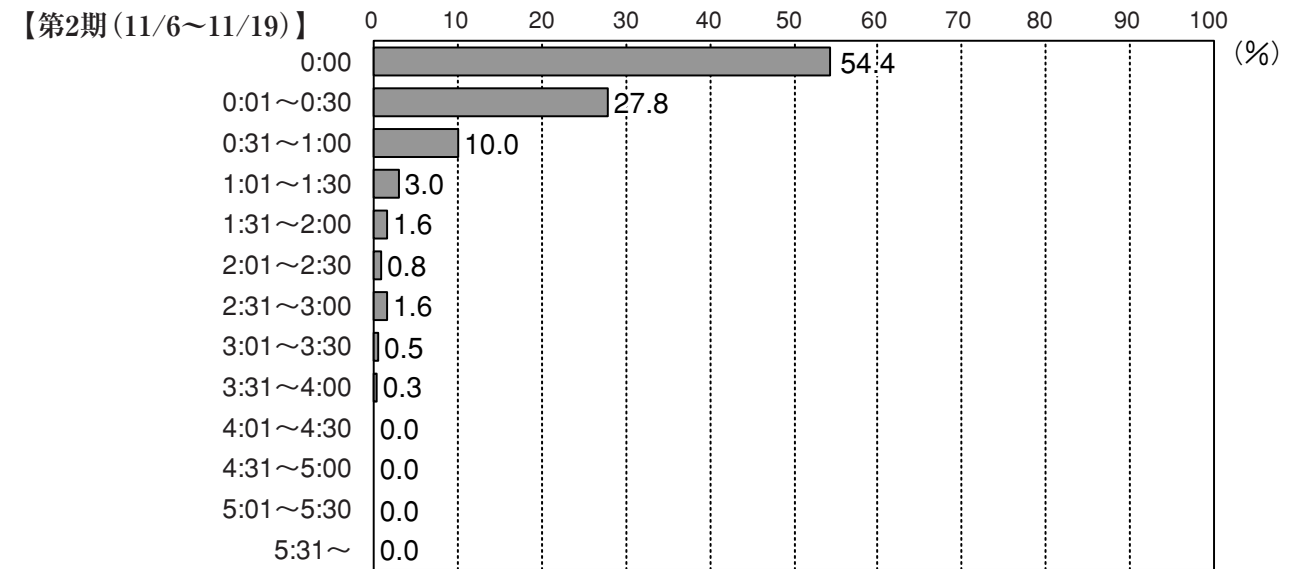
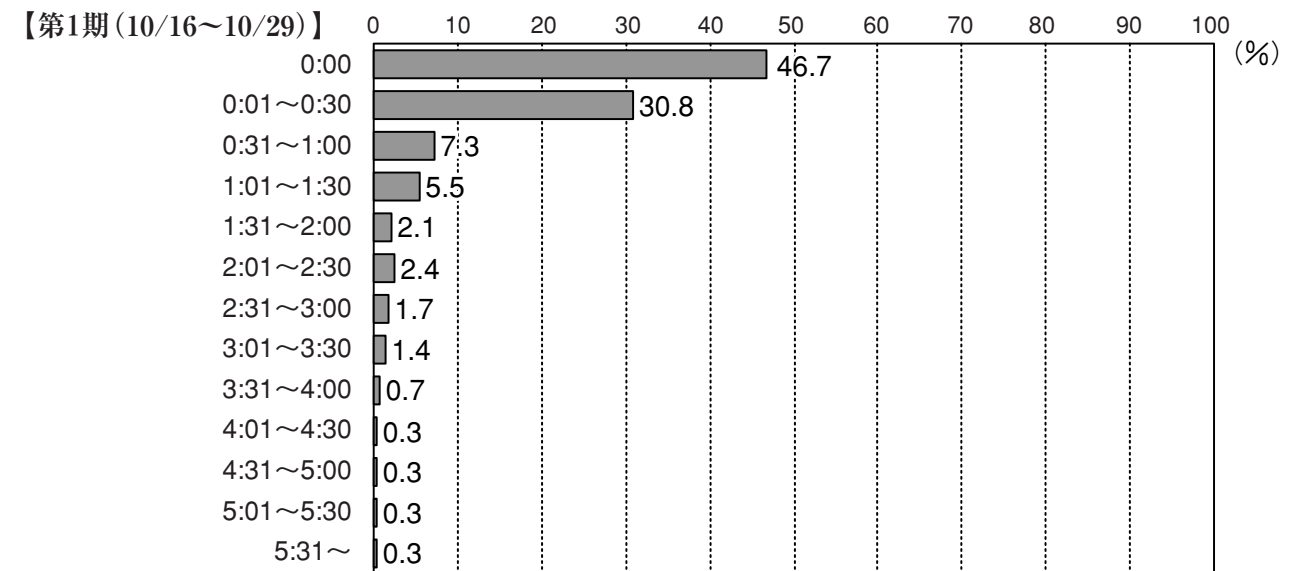
最後に、第3期であるが、持帰り時間0分は33.3%、1時間以下(0分を除く)の教員は49.7%、1時間01分~2時間以下の教員は9.3%、2時間01分~3時間以下の教員は4.9%、3時間01分~4時間以下の教員は0.4%、4時間を超える教員は2.2%である。

第2期では、持帰り時間量が0分の教員が一番多く、第3期は1時間以下ではあるが持帰りで業務を行うという比率が増えているのが特徴である。

図2-3-1 勤務日・1日あたりの平均持帰り時間量の分布



※時間量は「時間:分」を示す。たとえば「1:01~1:30」は「1時間01分~1時間30分」。



※時間量は「時間:分」を示す。たとえば「1:01~1:30」は「1時間01分~1時間30分」。

さらに、定時制教員の休日・1日あたりの平均残業時間量の分布を確認しよう。その結果を示したのが、図2-3-2である。調査時期全体をみると、休日の残業時間としては、9割近く(86.4%)が0分という結果である。1時間以下(0分を除く)の教員は4.4%、1時間01分~2時間以下の教員は4.7%、2時間01分~3時間以下の教員は2.3%、3時間01分~4時間以下の教員は0.6%、4時間を超える教員は1.5%である。

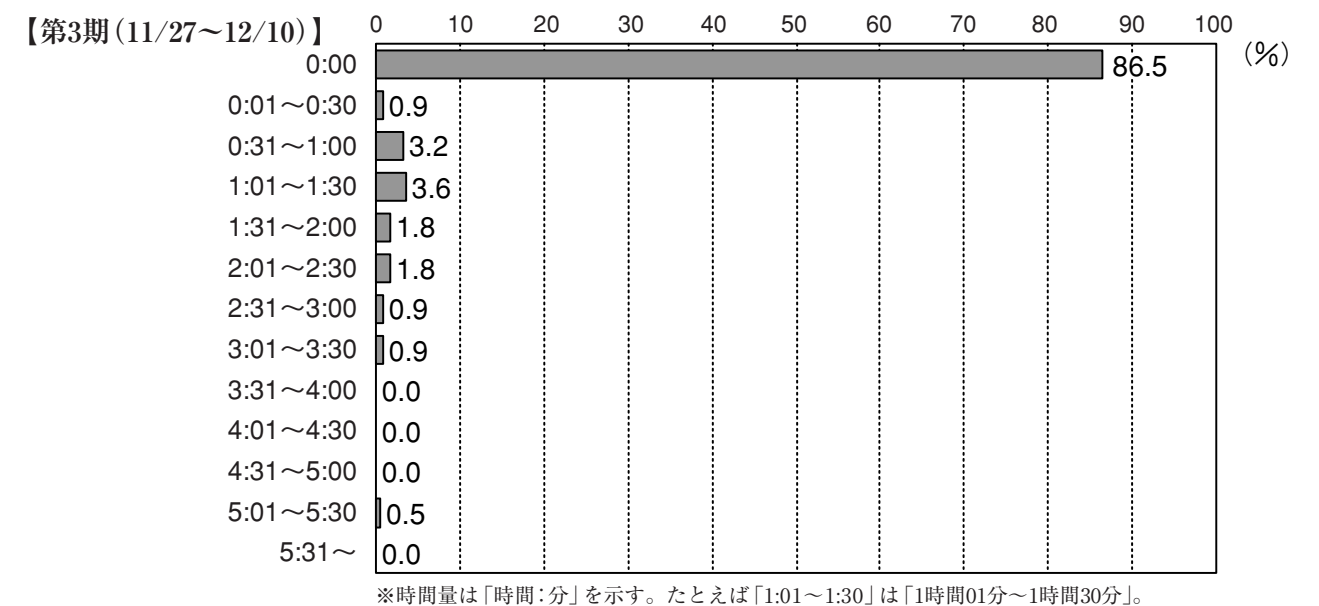
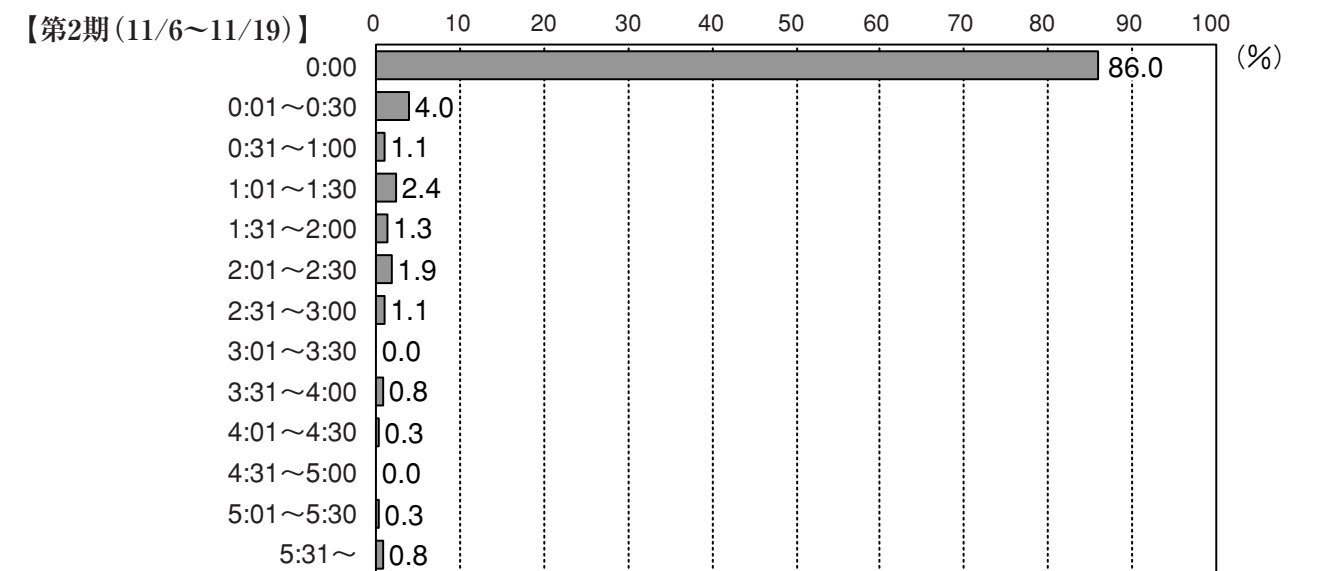
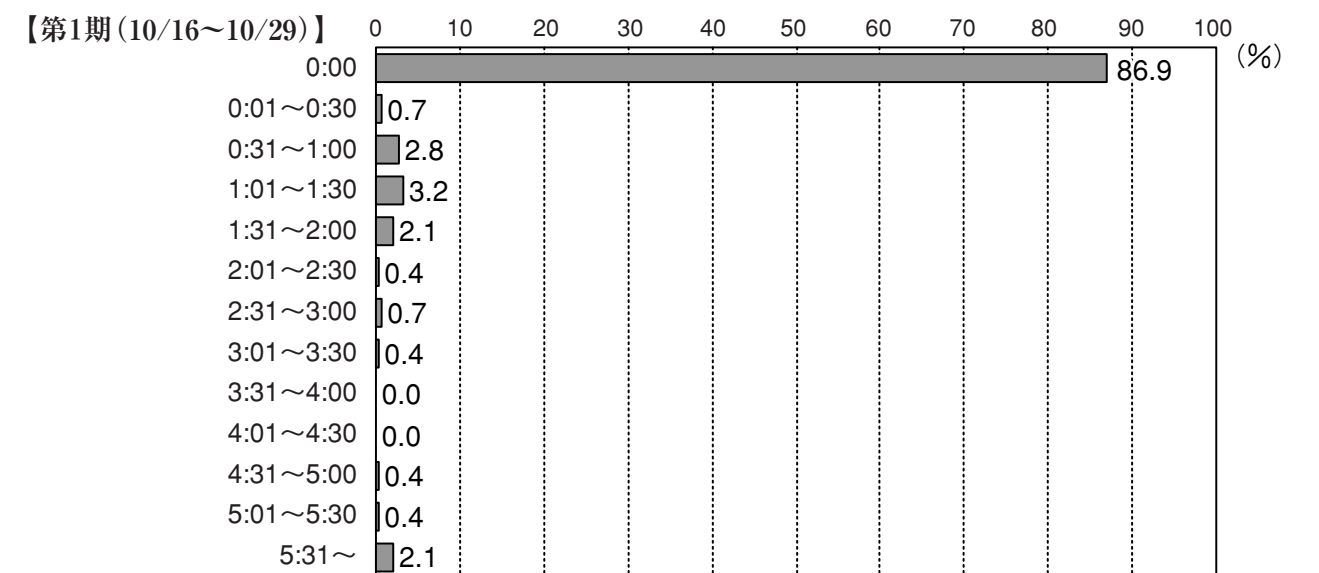
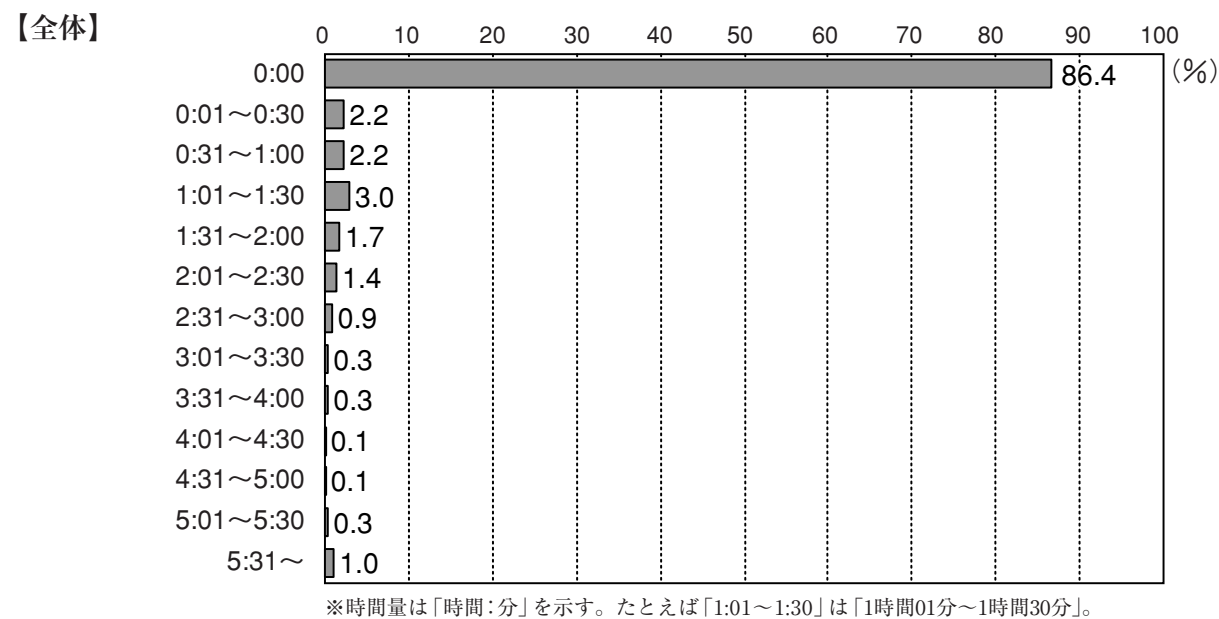
次に、第1期では、休日の残業時間0分が86.9%、1時間以下(0分を除く)の教員は3.5%、1時間01分~2時間以下の教員は5.3%、2時間01分~3時間以下の教員は1.1%、3時間01分~4時間以下の教員は0.4%、4時間を超える教員は2.9%である。

また、第2期の分布では、休日の残業時間0分が86.0%、1時間以下(0分を除く)の教員は5.1%、1時間01分~2時間以下の教員は3.7%、2時間01分~3時間以下の教員は3.0%、3時間01分~4時間以下の教員は0.8%、4時間を超える教員は1.4%である。

最後に、第3期であるが、休日の残業時間0分は86.5%、1時間以下(0分を除く)の教員は4.1%、1時間01分~2時間以下の教員は5.4%、2時間01分~3時間以下の教員は2.7%、3時間01分~4時間以下の教員は0.9%、4時間を超える教員は0.5%である。

第1期から第3期を通じて、休日の残業時間が0分の割合は9割弱と変化がなく、時間量の分布の様子もほとんど同じであるということがわかる。

図2-3-2 休日・1日あたりの平均残業時間量の分布



次に、定時制教員の休日・1日あたりの平均持帰り時間量についてみてみよう(図2-3-3)。

まず第1期から第3期までをまとめた全体の分布をみると、0分が約6割となっている。休日、約6割の教員は持帰りで業務を行うことはない一方、4割ほどの教員が持帰り業務を行っている。行っている教員も、その時間量は教員間での差があり、1時間以下(0分を除く)の教員は14.1%、1時間01分~2時間以下の教員は9.5%、2時間01分~3時間以下の教員は6.3%、3時間01分~4時間以下は3.5%、4時間01分~5時間以下の教員は1.4%、5時間を超える教員は2.8%となっている。

次に、第1期の分布をみると、休日の持帰り時間0分が64.3%、1時間以下(0分を除く)は9.5%、1時間01分~2時間以下の教員は8.9%、2時間01分~3時間以下の教員は6.7%、3時間01分~4時間以下は5.6%、4時間01分~5時間以下の教員は0.8%、5時間を超える教員は4.3%となっている。

また、第2期の分布をみると、休日の持帰り時間0分が65.1%、1時間以下(0分を除く)は14.7%、1時間01分~2時間以下の教員は8.8%、2時間01分~3時間以下の教員は5.7%、3時間01分~4時間以下は2.1%、4時間01分~5時間以下の教員は1.9%、5時間を超える教員は1.6%となっている。

最後に第3期の分布をみると、休日の持帰り時間0分が56.3%、1時間以下(0分を除く)は18.5%、1時間01分~2時間以下の教員は11.3%、2時間01分~3時間以下の教員は6.8%、3時間01分~4時間以下は3.2%、4時間01分~5時間以下の教員は1.4%、5時間を超える教員は2.8%となっている。

第3期の教員はほかの調査時期に比べ0分の比率が低く、休日、学校外や自宅で業務を行っている教員が多くなっていることがわかる。

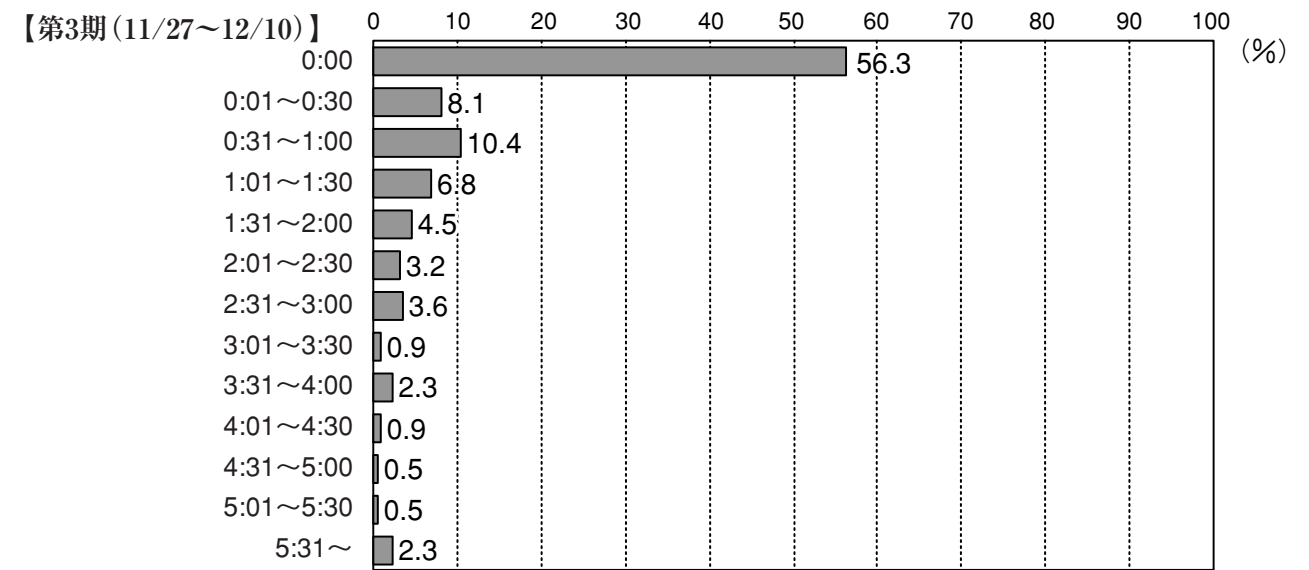
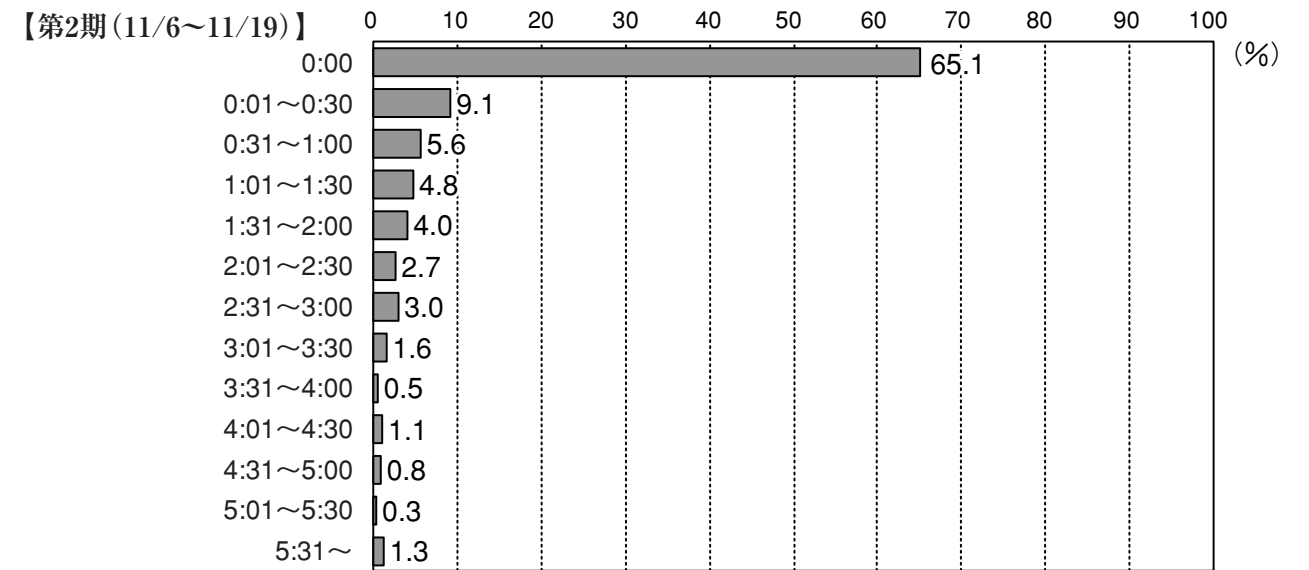
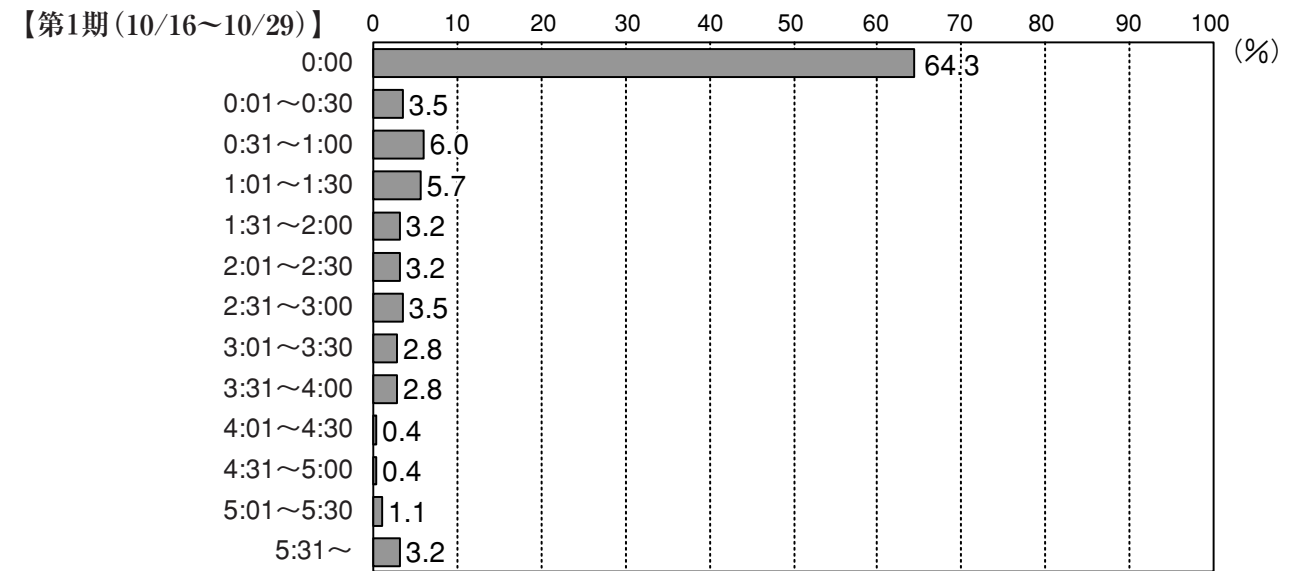
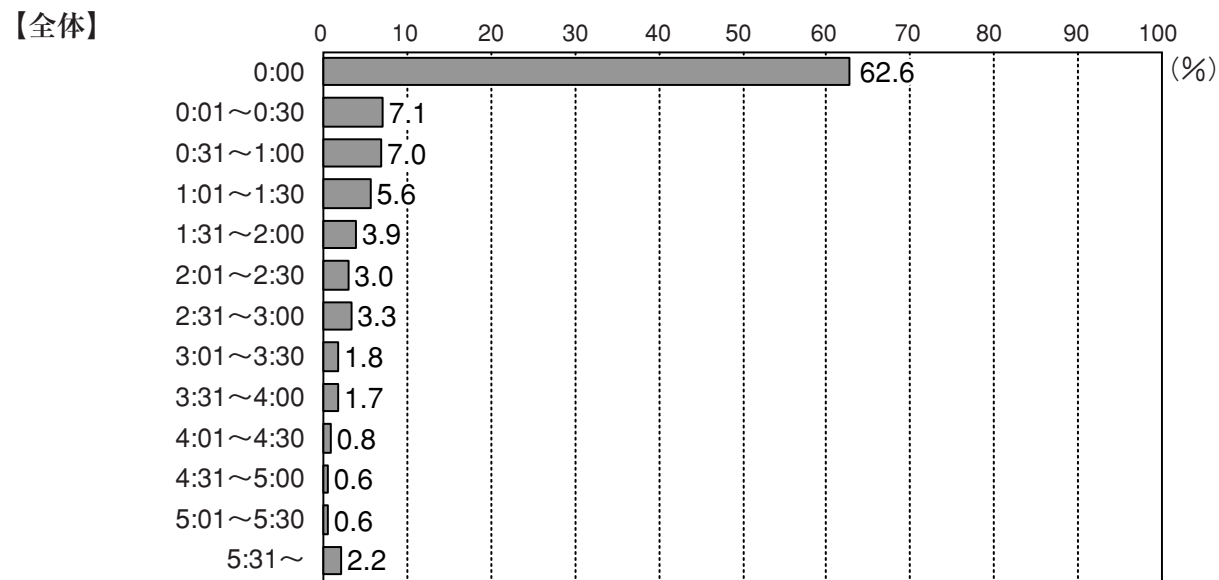
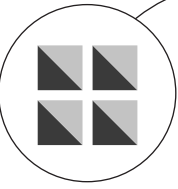


図2-3-3 休日・1日あたりの平均持帰り時間量の分布



※時間量は「時間:分」を示す。たとえば「1:01~1:30」は「1時間01分~1時間30分」。

※時間量は「時間:分」を示す。たとえば「1:01~1:30」は「1時間01分~1時間30分」。



まとめ

本報告書は、人材確保法の検討を含めた教職員給与の大幅な見直しを行う際に必要とされる高校教員の勤務実態についての基礎的なデータを提供するものである。ここでは、本報告書から得られた知見を整理して、全日制課程の高校教員の勤務実態を中心に特徴をあらためて確認したい。

まず、全日制教員の全体の労働時間量だが、各期を通してみた場合の勤務日・1日あたり平均残業時間量はおよそ1時間40分、持帰り時間量はおよそ25分であり、平均労働時間（持帰りを含まない）量は10時間00分であった。一方、休日の平均残業時間量は、時期や教員によってバラつきがあるものの1時間15分であり、持帰り時間量は1時間26分であった。

次に勤務日と休日の残業時間量・持帰り時間量の分布をみると、教員によって時間量が異なることがわかる。勤務日の残業時間量の分布については、まったく行わない教員は5%に満たず、多くの教員が30分から1時間30分の残業を行っている。残業時間の業務内訳としては、第1期と第2期では部活動の時間量が長く、第3期では成績処理の時間が長いなどの時期による違いもみられた。また各期とも授業準備が上位を占めた。勤務日の持帰り時間量の分布については、まったく行わない教員は約4割であるが、約6割の教員は持帰りの業務を行っている。持帰り時間の業務内訳をみると、成績処理や授業準備の時間が長かった。

休日の残業時間量の分布は、時期によって異なるもののまったく行わない教員は6割程度であるが、約4割の教員は残業を行っている。教員によってバラつきが大きいのが特徴である。業務内訳は、各期とも部活動の時間が長かった。休日の持帰り時間量の分布については、勤務日と同様にまったく行わない教員は4割程度であったが勤務日よりバラつきが大きかった。業務内訳をみると、第1期と第2期では部活動が長く、第3期では成績処理の時間が長いという时期的特徴があった。

このほかに、教員の属性別に勤務実態をみてみると

- ・性別では男性の残業時間量・持帰り時間量が高いこと
- ・年齢別では30歳以下の若い年齢の教諭ほど勤務日の残業時間量、休日の持帰り時間量が高いこと
- ・職階別では勤務日は教頭・副校長の残業時間量が高く、休日は教諭の持帰り時間量が高いこと
- ・主任別では生活・生徒指導主任の勤務日の残業時間量、研究主任の勤務日・休日の持帰り時間量が高いこと
- ・部活動顧問の有無別では運動部の顧問の残業時間量、休日の持帰り時間量が高いこと
- ・担当教科別では農業、商業などの専門教育の教諭の勤務日の残業時間量が高いこと、公民、地理歴史などの普通教育の教諭の休日持帰り時間量が高いこと

など、教員の属性による差があることがわかる。また、本文では詳しくみることはできなかったものの、属性により従事する業務の種類も大きく異なる。

さらに、全日制の教員と定時制の教員とを比較をしてみよう。定時制教員の勤務日の労働時間（持帰りを含まない）量は平均9時間弱であり、全日制教員（10時間00分）に比べ1時間ほど短い。定時制教員の勤務日の持帰り時間量は25分であり、全日制教員（26分）とほぼ同じである。一方、休日の残業時間量は、定時制教員16分に対し、全日制教員1時間15分と、1時間ほど差がみられる。同持帰り時間量は、全日制教員1時間26分に対して、定時制教員46分と、40分の差がみられた（いずれも全体の時間量での比較）。

本報告書は、高校の教員の勤務の実態を大きくとらえることが目的である。ただし、本文でとりあげた分析以外にも、基礎集計表や業務記録集計表から読み取れる教員の勤務実態も示唆に富んでいる。さらに、本調査の結果は、小・中学校と比較することも可能である（国立大学法人東京大学『教員勤務実態調査（小・中学校）報告書』2007）。本報告書が政府の政策決定をはじめとして、多方面の研究者、関係者などが議論をする際の基礎的な資料として活用されることを期待したい。